

北方領土ビザなし訪問団に参加して

ERINA調査研究部研究員 新井洋史

2001年7月27日から8月1日までの間、北方四島交流推進全国会議が派遣した2001年度第2回のビザなし訪問団の一員として、色丹島及び択捉島を訪問した。訪問団の目的は、「北方四島に在住するロシア人との交流を図り、相互理解を増進することにより、北方領土問題の解決促進に資する」ことであり、いわゆる調査出張ではない。ただ、日本固有の領土といいながら、現実にはロシアが実効支配しているため、なかなか訪れる機会のない地域でもあるので、現地で見聞したことなどを記して読者の参考に供したい。

まず、ビザなし交流の枠組みについて簡単に紹介しておく、これは1992年から始まったもので、パスポート及びビザなしで日本人及びロシア人が相互に訪問しあうものである。ただし、この枠組みで訪問できるのは、日本人は元島民や返還運動関係者などに限られており、逆にロシア人は四島の現住民に限られている。日本政府は、国民に対し、ロシアのビザを取得して北方四島を訪れることしないよう要請しており、墓参等の特別な枠組みがある旧島民やその家族らを除けば、このビザなし交流が唯一の北方領土訪問の方法である。2000年末までに、約4000人の日本人がビザなしで訪問している。

7月27日(金)

午前中、根室市内の千島会館にて結団式を行った。今回、現地での文化交流イベントなどの準備を「北方領土の返還を求める都民会議」が中心となって行ったため、東京の人が多かったが、その他、北は北海道から南は佐賀、熊本まで全国各地からの参加があり、これに通訳や事務局を含め、団員は総勢58名であった。その中には、政府広報番組の取材のための記者も同行した。

午後からは、市内の北方四島交流センターに移動して、NHKコメンテーターの前田一郎氏の講演を中心とした研修会を行った。会場となった交流センターは、2000年2月7日にオープンしたもので、北方領土返還運動及び日ロ交流の拠点として、これまでの交渉経過、日ロ両国の生活・文化などに関する情報を豊富な映像資料などを使って展示している。その後、一行は納沙布岬へ移動し、歯舞諸島を眼前にして、近くて遠い北方領土の現実を再確認した。

16時30分いよいよ乗船である。今回のビザなし訪問に使われたのは「コーラルホワイト号(514トン)」である。16時45分、藤原根室市長ら地元関係者が見送る中、船は岸壁を

離れた。約1時間後の17時55分に「中間点」を通過し、ロシアが実効支配する海域に入った。そこから、船は、国後島の古釜布湾を目指して北上する。波の高さは50cm程度で、思ったよりゆれは少なく、一行はほっとした表情である。台風6号の報道がなされる中、「こちらに来なければよいが」との思いは共通である。船は21時10分、古釜布湾内に投錨した。(ロシア時間では23時10分。以後の時間はロシア時間。)

7月28日(土)

朝、国後島古釜布湾に停泊したまま入域手続きを行う。入域手続きのためには、古釜布(ロシア名:ユジノクリルスク。以下同様。)から、担当官がはしけに乗ってやってくる。手続きは15分ほどで終了した。その間、本船は湾内に停泊したままであり、古釜布の町並みを眺めることができたが、距離が遠く(恐らく3 Km程度)、細かいところまでは見ることができなかった(写真1)。なお、海岸線には赤茶に錆びてぼろぼろになった船が何隻も見られたが、かつて津波で打ち上げられたまま、海に引き出す資金がないため打ち捨てられたのだという。さもありませんという気がするのであるが、一方で、これがロシア大陸部の沿岸であれば、陸に上がってしまった船は「何か」によって解体されて、スクラップとして売られてしまうのではないかとも思う。スクラップとして売ることすらできない離島の現実を見たような気がした。

さて、入域手続きが済むと、今回の最初の目的地である色丹島に移動である。約4時間の航海をへて、14時20分に色丹島の穴澗(クラバザボツコエ)へ到着した。穴澗の棧橋は木製の一本棧橋で、しかも片側には廃船が半分沈んだ



写真 1

まま捨て置かれており、着船できるのは一面しかない(写真2)。前面は浚渫されていないらしく、船首部分の喫水



写真 2

が2mほどでしかない本船ですら棧橋の根元まで入ることができない。船尾を突き出したままの接岸である。ところで、穴澗到着時点で根室港を出てから既にほぼ1日が過ぎている。皆、一刻も早く陸に上がりたいという気持ちであるが、受け入れ側との打ち合わせなどで30分待たされ、上陸できたのは15時過ぎであった。

色丹島には、穴澗及び斜古丹(マロクリルスク)の2つの集落がある。人口は、両方合わせて3,000~4,000人程度、2つの集落は幅8m程度の未舗装道路で結ばれている。その距離は約9km、時間にして15分程度である。集落内の道路も含め、島内は基本的にすべて未舗装である。

上陸後にまず向かったのは、棧橋から徒歩5分ほどの「文化会館」。歌やロシア民族衣装のファッションショーを交えた約1時間ほどの歓迎セレモニーがあった。そして、道路をはさんで向かいにある運動広場で、生花、お茶、書道、折り紙などの日本文化紹介、子供向けのミニゲームやミニバスケットシュートなどのゲーム、綱引きや腕相撲などのスポーツ交流を行い、日口の参加者で炭鉱節と潮来踊りを踊ってフィナーレとなった。

ところで、今回は色丹島に3泊したが、島内には宿泊施設がないため、その間船で寝泊りした。ロシア側の都合で、船を夜間棧橋についたまますることができず、毎日その都度湾内の錨泊地まで移動しなければならなかった。恐らく、夜間に人が出入りすることを防ごうとの意図であると思われるが、棧橋に残るロシア人と手を振って別れる「出港の儀式」を毎日行うのは奇妙な感じであった。穴澗湾は鏡のような水面でまったく揺れが無く、天然の良港であることをうかがわせた。前夜の古釜布湾で船の揺れを感じながら眠りについたのとは、大きな違いであった。船自体の居住性について言えば、決して広い船内では無かったが、「海の男」が作る食事はうわさにたがわず美味しく、

全行程を通じて食事を楽しみにすることができた。

7月29日(日)

9:00に再上陸した。まず、車で5分ほどの高台にある学校に向かう。校舎は、地震で崩壊した校舎の代わりに日本政府が人道援助で整備したプレハブ校舎である。ここでは、簡単なロシア語講座と児童・生徒によるミニコンサートが行われた。ロシアの歌や踊り、さらに日本の歌など、定番どおりのプログラムであるが、かわいらしい子供たちの一生懸命な様子に、訪問団員の目元も自然と緩む。小学校1年生の男の子が、たどたどしい指使いでピアノ伴奏してくれるのに合わせ、訪問団員は何曲かの日本の童謡を歌った。曲目が「ふるさと」に代わると、旧島民らの心情に思いを馳せるのか、団員の歌声にも熱がこもる。

ミニコンサートが終わると、「対話集会」である。「子供のしつけ、家族、社会における女性の立場」のテーマでの対話集会は、そのまま校舎内で行われた。「ビザなし交流、青少年問題、環境問題、共同経済活動の見通し」というもう一つのテーマでの対話集会は、「文化会館」に移動して行われた。後者の対話集会ではロシア側から、10年目を向かえたビザなし交流を振り返り、今後のあり方を考えていこうとの問題提起がなされた。ロシア側は、合併企業の設立など経済交流へ踏み込みたいとの希望があるが、日本側は領土問題と並行して議論すべき問題であるという立場をとっており、あまり踏み込みたくない部分である。結局、議論は低調に終わり、ロシア側の仕掛けは不発に終わった感じであった。なお席上、筆者も発言を求め、日口両国の実情を知る子供たちが将来日口交流の中心的担い手となることを期待したい、この島はそのための大きなポテンシャルを持っているのではないかとの考えを述べた。先方の説明では、既に何人かの子供たちが島外の大学で日本関係を専攻して、日本専門家への道を歩んでいるとのことである。

さて、7月29日はロシアの海軍記念日である。対話集会の後、斜古丹(マロクリルスク)に移動し、斜古丹湾内で行われた上陸作戦の公開演習を見学することができた(写真3)。もちろん演習なので、実弾は装着されていないのであるが、守備隊側の装甲車から発射される機関銃の葉きょうが目の前2~3m先まで転がってくるという至近距離での「観戦」は臨場感の高いものであり、思わず身をすくめる場面もあった。続いて、そこから5分ほど歩いたところにある島内唯一のレストラン(島民の間では「カフェ」と呼ばれている)で昼食をとった。

食事後、各3~4人のグループに分かれ、一般家庭を訪



写真 3

問して交流するホームビジットを行った。筆者らのグループ4人が訪問したのは地元の水産加工企業「オストロブノイ社」で技師として働くマイコフさんの家であった。この水産加工企業は、かつては国営企業であったが、約2年前に、モスクワの企業が資産を全部買い取る形で民営化され、非公開型株式会社となったとのことである。民営化後、旧生産ラインでの生産を続ける一方、新工場の建設を行ってきたが、まもなく最初の加工用原料(サンマ)が納入され、生産が開始される予定である。現在、さらに新たな生産ラインの整備を行っている。現在の取引相手は、原料調達及び製品販売ともロシア国内中心である。日本では、北方領土沖で韓国漁船がサンマ漁を行うことが大きな問題となっており、マスコミでも大きく取り上げられたりしていたが、マイコフさんはこのことを知らず、韓国からサンマを調達する契約もないと説明していた。地元の加工業者としては、自分たちの必要な原料が確保できれば、あとはこの誰が獲っても同じで、特に関心が無いということかもしれない。後に訪れた、択捉の行政政府でも同様の印象を持った。また、製品の販売先として、外国市場の可能性も大きいのではないかといった話をしたところ、現時点では輸出予定はないが、中国市場等は可能性もあると思うし、今後徐々に販売先を拡大していけばよいと思うとのことであった。

さて、ロシア人の家庭に招待を受けたことのある人ならご存知だと思うが、食べきれないほどの料理と飲みきれないほどのお酒(ウォッカ)で歓迎を受けた。次々勧められるお酒と料理を断るのも心苦しくなったころ、我々は腹ごなしに少し散歩することを提案した。マイコフさんとともに、歩いて数分の彼の「ダーチャ」に向かう。ダーチャとは通常都市住民が郊外に持つ土地のことであり、「別荘」と訳される。ただし現実には、多くの場合、自家用の野菜などを栽培する「家庭菜園」である。往復に数時間かかることもあるようなモスクワなど大都市では「別荘」と言って

もまったくの嘘というわけではないが、徒歩数分のマイコフさんの場合はまさに「家庭菜園」である。ダーチャでは、ジャガイモや各種の野イチゴなどを露地で作っているほか、小さな温室もあった。ダーチャは斜古丹湾を見下ろす斜面にあり、美しい景色と心地よい風で、気分をリフレッシュすることができた。

7月30日(月)

前日のホームビジットは、住民レベルでの交流が目的のはずだったのだが、図らずも斜古丹の水産加工工場についてのヒアリングの様子を呈してしまった。たまたまそういう家庭にあたったということなのだが、貴重な機会であった。ところで、色丹島のもう一つの集落である穴澗にも、我々の船が停泊する栈橋のすぐ近くに水産加工工場がある。こちらは、2年前に、択捉島に本社がある「ギドロストロイ社」の傘下に入ったとのことである。7月30日午前中に、実際に工場内を見学することができた。案内してくれた工場長代理のニーナ・シロチェンコさんの話によれば、工場ではサンマとイクラの加工を行い、最大処理能力は、原料ベースで1日400トンとのことであった。栈橋から工場までは原料魚(サンマ)輸送用のパイプが敷設されており、漁船から工場へ直接原料が輸送されるようになっている。工場内部では、魚の大きさにより選別し、大きい方は三枚におろしてフィレに、小さいものはドレスに(頭を落として開きに)し、それを冷凍して出荷するとのこと。それぞれのラインを見せてもらった。ただし、昨シーズンの原料魚の加工が終わったのち、約半年間生産ラインは動いていないとのこと、ラインの一部は修理中であったり、択捉島の他工場へ持ち出されたりして、工場の臨場感というものがまったく感じられなかった(写真4)。訪問団には漁業関係者もいたが、「工場内にウロコ一枚落ちていないし、本当に稼働していたのかなあ」と感想を漏らすほどであった。北方領土周辺水域でのサンマ漁は8月1



写真 4



写真 5

日が解禁日だったので、1週間後くらいに訪れれば、今シーズン初入荷のサンマ加工をしている場面を見ることができ、印象はまったく違ったのかもしれない。ただ、基本的に半年しか操業できない工場というのはいかにも非効率である。なお、繁忙期には島外からの季節労働者を雇うとのことであり、工場から程近いところに寄宿舎が建っている。

順序は前後するが、同じ日の夕方には、同じく穴澗にあるディーゼル発電所を訪れた(写真5)。これは、日本政府が人道援助として建設したものである。この施設は、南クリル地区資産管理委員会からの委託を受けてギドロストロイ社が運転管理を行なっているとのことであった。訪問団員の中には国民の税金で援助した公共施設の運転を一民間企業に任せていることに違和感を持つ人もいたが、現実には、行政部門には技術者がいないことや燃料確保の問題を考えると、同社に委託するのが合理的であるとの見方も成り立つ。基本的に燃料確保は行政の責任ではあるらしいのだが、燃料は不足気味で、日本からの援助を受けることで何とか無停電の電力供給を実現しているのが実態のようである。そこで、ギドロストロイ社が持っているであろう軽油調達の「あの手この手」を行政としても頼りにしているのではないかと恐らく両者の間では、軽油の「貸し借り」もあるのではないかとと思われる。なお、斜古丹地区の電力供給は別系統であり、昨日のマイコフさんの話によれば、現在は毎日0:00～7:00の時間帯に停電しているとのことである。一時期、日に2時間くらいしか電気が来なかったことを思えばだいぶ改善されたとは言うものの、日本の援助を受けることができた穴澗とは状況が異なっている。

この日は、このほか午前中に斜古丹にある日本人墓地と幼稚園を訪れ、それ以外の時間は屋外で過ごした。昼食も、湖のように静かな水面を見せるマタコタン湾のほとりに天幕を張っただけの場所であった。昼食後、水辺に沿って散策すると牛が5～6頭歩いてくる。放牧地の柵がある

わけでもなく、牛舎も見当たらない。どこから来て、どこへ向かうのか、まさに気の向くままといった感じである。マタコタンを後にして、島の反対側、太平洋に面したイネモシリを訪れる。こちらは切り立った岩肌をみせる海岸線で、マタコタンとは趣が違っているのであるが、人工の営造物がほとんど視界に入っていないのは同じである。波打ち際には、人の背丈の倍はあるような昆布が打ち上げられている。島を横断してイネモシリまで来る道路は、幅が3m程度、路面状態も悪い。島の人たちもあまり来ることがないという。しばし、俗世間を忘れる。

色丹島での最後の行事、交流夕食会が済むと、我々は船に乗り込んだ。棧橋で見送るロシア人に手を振るのは3回目であるが、今日は前2日とはまったく意味が違う。皆、名残を惜しむように力いっぱい手を振っている。19:20出航。色丹島から択捉島の紗那(クリルスク)までの航海は、約13時間。途中、国後島と択捉島の間の国後水道を通る。潮の流れが速いので揺れるかもしれないとの予告もあったが、風は真後ろからの追い風、潮にも乗って、あっという間に水道を抜けた。

7月31日(火)

択捉島には、船を着けられる棧橋がない。沖合で待つと、9:00ころにはしげがやってきた。はしけに乗り移って、内岡(キトープイ)に上陸する。ここから紗那までは、車で10分ちょっとである。色丹島と同様、道路は未舗装であるが、かなり硬く固められており幅員も10mくらいあるのではないかとと思われる、走行には支障がない(写真6)。

紗那で、一行はまず、クリルスク地区行政を訪問した。行政庁長官代行のカルプマン氏から地域の概況を聞いた。ロシアの行政区分では、国後、色丹、歯舞が南クリル地区を構成し、択捉はさらに北にある得撫などとともクリル地区を構成する。ただし、8,000人強のクリル地区住民のほとんどは択捉島に住んでおり、他の島の人口はごくわずか



写真 6

とのことである。島の主産業は、ここでも水産加工業で、年間30,000 tの加工能力があり、主に日本、アメリカ、韓国、中国などに輸出されている。ギドロストロイ社の本社があるのもここである。我々のはしげが着いた内岡の港の近くにも、最近建設されたと思われる加工工場が見えた。

島の公共施設としては、学校(ロシアは初等中等一貫の11年制)が4校、幼稚園が3ヶ所、50床の病院と診療所があるという。学校付属のものも含め、12ヶ所の図書館(室)があり、これらを中央図書館で統括して「統合図書館システム」として運営しているとのことである。この中央図書館を訪れた。建物は、戦前の日本の小学校を改修して使っているとのことである。敷地の入り口には、今も校門が残っていた。今回の団員の1人はこの小学校に通っていたということで、校門前に立ち止まって当時の様子など記憶をたどっておられた。図書館の蔵書は32,000冊、「統合図書館システム」全体では62,000冊だという。日本語の図書も徐々に増えているとの説明があったが、まだまだわずかで、「飾り」として置いてあるという域を出ていないように感じた。

学校も訪問した。アメリカの支援で整備されたという校舎は、夏休みということもあってガランとしており、天井の高さや廊下の広さが印象に残った。館内には、ケーブルTVシステムが導入されているほか、2つのコンピューター室があって、インターネットにも接続されている。児童数は約400人で、最終的な大学進学率は75%程度に達するとのことであった。大学卒業後、15~20%くらいの学生は島に戻ってきて、ギドロストロイ社、行政府、警察、病院、学校等に就職する。学校関係者への質問の中で、訪問団員から「授業では、島の歴史をかつて日本人が住んでいたことも含めてきちんと教えるのか」との質問があった。「教科書に書いてあることを、きちんと教えています。」との回答には、苦笑が広がった。実際にどのように教科書に記述されているのかは知らないが、日本の立場に十分配慮した書き方になっているとは考えにくい。ここには、もう一つの歴史教科書問題があるといえるかもしれない。

視察の合間に、買い物の時間があつた。ソ連時代に食料品店だったお店で、さまざまな生活雑貨まで売っているのは、ロシア各地で見られる形態である。ロシアには行ったことがないという団員も多く、マトリョーシカなどのロシア的なお土産を買いたいという希望があつたが、在庫がある店はほとんどなく、一部の人しか購入できなかった。水産加工の町ということで、水産物の缶詰を買おうと思った人もいたが、店頭にあるのはロシアの西端カーニングレード製だったりして、地元製がない。「隣の店に行つて

みたら」という店員の言葉に従って、行つてみてわかつたのは、地元のギドロストロイ社は冷凍品を製造するのみに缶詰は作っていないということであつた。売り子には、夏場に必ず何回かは訪れる日本人を相手に商売をしようという意識は無いようであつた。

最後のプログラムは、ホームビジットであつた。これが終われば後は帰るだけというリラックスした気持ちもあつてか、言葉は必ずしも通じないながらもそれぞれの家庭で会話も弾み、食事も酒も進んだようである。集合場所までそれぞれの家族に送ってもらってきた団員は一律に、充血した目とふらついた足元であつた。3時間前には会つたこともなかつた人たちと抱き合つて別れを惜しみながら、我々は島を後にした。はしげで船に戻り、18:40国後島に向けて出航した。

8月1日(水)

来た時と同じく、古釜布湾内に停泊したまま、事務手続きを行なう。4日前に来たときには停泊している船はほとんどいながつたが、今日は貨物船や漁船が何隻か見える。漁船は、今日から解禁になるサンマ漁の船らしい。領土問題と漁業問題が複雑に絡みあう現場海域にいることを思い出した。手続き終了後出航し、約4時間半後の12:30には根室の街を眼前にしていた。

おわりに

島を訪れた4日間、舗装道路を走ることはなく、信号も一つもなかつた。牛の糞を踏みそうになつたことは何度かあり、あまり人の手の入っていない自然の姿を楽しむことができた。山奥の林道まで舗装道路で整備する日本の現状を考えると、インフラ整備のギャップは天と地ほどもある。四島合わせて福岡県と同じくらいの面積に、終戦当時の日本人人口が約17,000人、現在のロシア人口が約15,000人程度と、常に人口密度が低いままであつた。領土返還後の地域開発を考える際には、島全体の自然はほとんど手をつけずに残したまま集落周辺だけインフラ整備を進めることが、自然保護の観点からも経済的効率性の観点からも望ましいことであると思う。その場合であつても、日本本土並みの生活環境を実現するには、ありとあらゆるものを作り直すくらいの覚悟が必要であり、相当の費用がかかると思われる。